

22. また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。
23. 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

説教

今週は広島・長崎への原爆投下の日（6日、9日）、来週15日は敗戦記念日を迎えます。8月は平和を考えさせられる時です。日本の国は、かつてアジアの諸国を侵略し、国民に偶像崇拝を強要し、不法な戦争で多くのいのちを奪って、神と人の前に罪を犯しました。教会も神社参拝という偶像崇拝の罪を犯し、侵略戦争に積極的に協力して、「世の光、地の塩」としての責任を果たすことができませんでした。過去に犯した罪は取り返しのつかないことですが、きちんと反省しておかなければ、また同じ過ちを犯すこととなります。今、日本が世界中で戦争をする国になろうとしている時代にあって、教会とは何であり、何をなすべきか、そのためにはどのような備えが必要かを共に聖書から学びましょう。

教会とは何か。この問いの答えは必ずしも容易ではありません。使徒パウロは、迫害の中にあるエペソの教会の信徒たちを励ますために、教会とは何か、その本質を彼らが正しく理解するよう祈りました（エペソ1:17-19）。そしてその上で、教会とは何かを解き明かします。「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」(23)

これによると、教会とは「キリストのからだ」です。「からだ」と言うからには「かしら」（頭）があるのですが、その「かしら」こそ「キリスト」です。神は、キリストを「かしら」として、「教会にお与えになりました」(22)。そして、この「キリスト」は、死人の中から復活したキリストであり、「すべての支配、権威、権力、主権」の上に君臨し、「いっさいのものを足の下に従わせ」、「いっさいのものの上に立つ」お方です。つまり、この地上にどんなに巨大な帝国が存在し、強大な武力・権力を持つ支配者が登場したとしても、キリストはそれを下に見下ろす、それよりずっと強いお方です。そして、その世界最強のキリストを「かしら」とする教会は、「かしら」なるキリストの命令に聞き従って、キリストのみこころを行います。

このように、天地宇宙の支配者なるキリストを「かしら」とする教会は、地上のあらゆる支配、権威、権力をはるかに超越したキリストのみこころを行います。罪深いこの世にありながら、罪深いこの世の権威には束縛も支配もされることなく、ただ黙々と自分たちの「かしら」なるキリストの命令を守り行うのです。そうして、神の国をこの世にもたらし、キリストの王国を広めます。

「教会はキリストのからだ」を説明している「いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところ」の直訳は「すべてに於いてすべてを満たしておられる（あるいは完成・成就させる）方の充満（完成・成就）」です。教会にはキリストが充満し、そのキリストは一切を満たすお方です。神の永遠のご計画を実現し、神の歴史を完成させるお方です。どんなに見た目には小さくみすぼらしくても、教会にはそのキリストがおられます。しかも、満ちています。教会を満たしておられます。教会には、天地万物を支配する全能のキリストが満ち満ちておられるのです。世界はこの方が創造しました。この方のみこころに従って、この方中心に動いています。キ

リストは王の王、主の主です。世界にはびこる一切の悪を審判し、歴史を完成させるお方です。パウロは 19 節で「神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように」とエペソ教会のために祈りましたが、なるほど私たち教会にはこれ以上ない究極の神のすぐれた力が与えられているのです。

それでは、それはどのようにわかるのでしょうか。すなわち、教会はこの世とは区別される特別に聖別されたものですが、キリストが満ち満ちている特別な臨在を私たちはどのように知ることができるのでしょうか。それは「神のことば」によってです。具体的には、（見えない神のことばである）説教と（見える神のことばである）聖礼典によってです。教会には神のことばが委ねられているのです。これがこの世のあらゆる組織と決定的に異なる点です。世界の歴史が大きく動いた 16 世紀の激動の時代、宗教改革者たちは教会とは何かを真剣に考えました。そして、教会のしるしを「神のことば」と考えます。彼らにとっての関心は、会堂を大きくするか教勢の拡大ではありません。大きさで言えば、当時としてはカトリック教会の勢力の方が圧倒的に巨大です。改革者たちにとっての唯一の関心は、教会の本質である「神のことば」の「純粹」さの追求にありました。そして、福音を「純粹に」語る時に、復活のキリストの栄光をあらわし、人と世界を改革して、滅びゆく世にいのちをもたらすと考えたのです。

その一人、ツヴィングリは、教職者たちが体制にへつらって福音を「純粹に」語らない墮落した状況を厳しく非難します。「つい最近のこと、司教は一人の司祭をある教区に任命したが、その時司教はこの司祭に要望して言うには、（聖職者の）身分を一語でもそしるようなことがあってはならない、また福音を宣べ伝えるに当たっては、誰かを非難する程度まで言うてはならない、と。これでは哀れな牧師は一体何を説教できようか。全世界が悪徳に沈潜しているのに、これを叱責してはならないというのであろうか。それ以外の何が牧者に求められているだろうか。」それで、為政者や教皇、すなわち人を恐れて福音の光を曇らせている墮落した教職者にツヴィングリはこう呼びかけます。「ここから牧者はよく知らなければならない。すなわち、たとえ全世界が彼に逆らい立とうとも、神のことばに雄々しく踏み留まり、多数のバアルの祭司を恐れてはならない。…牧者が全ての悪にどう立ち向かわなければならないかについて、これ以上多くの預言者たちから例を挙げる必要があるだろうか。預言書を手にするならば、そこに見出されるのは、この世の権力者と悪徳との永遠の戦い以外の何物でもない。…ヨハネは、ヘロデが如何に凶暴かを知っていた。民衆の間では、その恥ずべき生き方について語ることさえ許されないほどであったが、しかも見よ、だからといってヨハネは何一つ見過ごしにすることはなかった。だれひとりとしてヘロデを咎めようとしなかった時、彼はそのもとに赴き、その悪徳を非難して言った。『あなたは兄弟の妻をめとるべきではない』（マルコ 6:18) しかし、ヘロデはこのような悪行をあえてし、ヨハネは捕らえられ、殺害された。そこから牧者の学ぶべきことは次のようである。君侯や民衆や司祭らの間で行われていることすべてに於いて、だれもこれに触れようとしなない場合、大きさや強さや数やその他何物によっても脅かされることなく、神が命じられるや否や、たじろぐことなく、彼らが悔い改めるまで叱正を続け、例外を作ってはならないということである。…当局者が協調的である場合には、それだけ穏便な方法で悪徳を除去することができようが、万一そのようでない時にも、牧者はそのために一命を賭すべきであって、神以外からの助けや救いを期待してはならない。…神はいつでも時宜にかなって罪深いこの世に警告を与えるためにその預言者を遣わすのであるから、見張りや警告の役目をなおざりにしてはならない。一度警告が与えられたからには、もはや悔い改め以外の何物も役に立たない。そうでないならば、いっそう大きな災禍が起こるのであろう。」

ツヴィングリは、説教を「最も聖なるもの」「他のすべてにまさって、最高に必要なもの」と考えました。彼らにとっての説教は、ルターのように、それを宣教して人々に信仰義認と救いをもたらすのみならず、その先をも意味します。すなわち世界を改革するものです。たとえ相手が悪徳権力者であっても、彼らを悔い改めさせて、世界を

変革する、それが説教です。この「最も聖なる」つとめを侮って、神よりも人を恐れ、愚かにも勝手に神のことばを曲げて妥協して語るならば、たとえ「百年」語り続けたとしても世界を変えることはできません。しかし、「たとえ全世界が彼に逆らい立とうとも」、牧者が人の顔色を見ずに「一命を賭」して「純粹に」真っ直ぐ語るならば、神のことばは罪の世にいのちをもたらします。人も世界も新しく造り変えて、滅びゆく世に神のいのちをもたらすのです。ツヴィングリの理解した通り、説教こそは「最も聖なるもの」、世界「最高」にして最強のつとめなのでした。

この理解は使徒パウロの教会理解でもあります。教会はキリストのからだです。教会のかしらは天地万物を創造し、支配するキリストです。教会はこのキリストの栄光を世にあらわします。かしらなるキリストのみこころをひたすら忠実に行って、キリストの栄光をあらわします。そうやって、罪の世を神の国に改革します。罪に死せるこの世にいのちをもたらすのです。

とは言え、こうした宣教の戦いは生易しいものではありません。偶像崇拜一色の時代に「偶像を拜むな」と宣教することはいのち賭けのつとめです。国家総動員体制で総力戦を戦う中で「殺してはならない」と宣教することは、「非国民」「スパイ」呼ばわりされて、保安法で処罰・抹殺されることを覚悟しなければできません。神のことばを罪の世に語ることは、こういうことです。それでも、語らなければなりません。時代がどんなに暗くなっても、揺るぐことなく、語るべきは語り、なすべきことをなさねばなりません。一見、効果は薄いように見えても、神のことばは必ず罪の世を新しく造り変えます。姦淫している人を救う唯一の道は、「姦淫してはならない」と教える神のことばです。無理で不法な侵略戦争をして破滅に向かう国家を生かす唯一の道は、「こんな戦争はやめろ」「殺してはならない」「盗んではならない」と教える神のことばです。偶像崇拜の罪を犯して滅びようとしている罪人を救う唯一の道は、「あなたには、わたしの他に、他の神々があつてはならない」と教える神のことばです。

人の顔色を見ず、国益だの利害だの危険だの全く少しも顧みずおかまえなしに、ただ天地万物の造り主にして支配者なるキリストだけを仰いで、キリストの命じるままに、神のことばをそのまま純粹にストレートに教えて悔い改めを迫る、ここに最も大胆なキリストのからだなる教会の恐るべき福音宣教の姿があります。教会はキリストのみこころを最も大胆に行つて容赦なく悔い改めを迫るのです。

あらゆる困難と迫害に耐えて、かしらなるキリストの栄光をあらわしましょう。まずは、語ることです。次には、語り続けることです。神のことばが周知され、世の常識となり、一般化するまで、さらには人々の生き方そのものになるまで、疲れず、たゆまず、命あるかぎり、語り続けましょう。